

Title	キャンパスにおける礼拝、その充実：チャペル完成を目前にして
Author(s)	森田, 美千代
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume20, 2005.3：127-134
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3228
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

キャンパスにおける礼拝、その充実——チャペル完成を目前にして——

森 田 美千代

「キャンパスにおける礼拝、その充実——チャペル完成を目前にして——」というテーマで、今回発題の機会が与えられましたことを感謝いたしております。また、先生方とのよき交わりの時が備えられましたことも大変嬉しく思っております。まず最初におことわりしておかなければならないことは、以下の発題において、私は、「理念」に関することにはほとんど触れていないということです。「理念」については、あらたなる機会をぜひ設けていただいて、然るべき先生方に発題していただきたいと願っています。では、発題に入らせていただきます。

1. なぜ私は全学礼拝に出席するのでしょうか。それは、第一に、個人的なことですが、これからの自分自身の人生をどう生きるか（どう死ぬかも含めて）を考えずにはおれないからです。研究者であることと、キリスト者としてこの世の生を全うすることのいずれかを選ばなければならぬとしたら、私は後者を選ぶことをまずしなければならぬだろうと思っております。このことが、私が礼拝に出席する第一の理由です。第二に、同じキャンパスに生活している者として、私は、全学礼拝を、主にあつて、教職員と学生がひとつになることができる時間と場であ

と考・え・て・お・り・ま・す。ですから、全学礼拝に出席することは、私にとつてとても重要なことであると考えております。

2. 聖学院大学のながい間の悲願でありましたチャペル建築の完成を、私たちは、今、目の前にしております。そのチャペル建設を「外なるチャペルの建設」とみなしますならば、キャンパスにおける礼拝、その充実は「内なるチャペルの建設」といえます。〔外なるチャペルの建設〕と「内なるチャペルの建設」は、私の造語ではありません。聖学院理事長の大木先生が、昨年八月の起工式の前に、緑聖教会に説明に来てくださった時に、私ははじめてこのコンセプトを聞きました。それ以来緑聖教会では、濱田牧師をリーダーとして、自覚的に「内なるチャペルの建設」を、教会全体また教会員一人ひとりの目標にしています。ここで言っております「内なるチャペルの建設」とは、個々人が内向きになろうということではありません。ハードとしての外なるチャペル建設に対して、「内なるチャペルの建設」とは、大学コミュニティー全体を含むソフトを意味しております。つまり、大学コミュニティー全体が、礼拝を中心として、研究においても教育においても人間関係においても、よりよいコミュニティーになつていくことを意味します。

3. 遠藤周作が、どこかで、「その人のなかを一度横切ったもの（ことば）は、その人が意識していきようがないまいが、好きであろうが嫌いだであろうが、その人のなかに刻印され、その人に影響を及ぼさずにはおかないであろう」というようなことを書いていたと記憶しております〔緑信叢書〕24の六〇ページ参照。一度その人のなかを横切ったことばは、本人は忘れていても、その後の人生において苦しみや悲しみにあつた時に、必ずや解決を与えるヒン

トになることを、私は信じています。ですから、若者たちに、今はわからなくても、聖書のことばをできるだけ多く与えておく（インプットしておく）ことはとても意味があると思っています。

4. これまでの聖学院大学を第一期と見なし、それを土台づくりの時期としますならば、これは成功したと言えると思います。チャペル完成をもって、聖学院大学の第二期の歴史がはじまると認識しております。土台づくりが終わり、聖学院大学は、いよいよ大きく発展する時期を迎えているといつてよいでしょう。その場合、同窓会と後援会の協力なしには、この時期の発展を成功させることは到底できないと思います（阿久戸光晴学長による「聖学院大学新年教職員研修会・年頭教書」の二ページの次のことばも参照のこと。「大きく発展する大学法人は、必ずや同窓会の活性化がありますので、本年度は関係者の大きな努力で再建なった同窓会の内実強化の年としたいと思います。」）。

ですから、クリスチャンの卒業生を全学礼拝に招いて話をしてもらおうのを私は提案したいと思います。これは、在学生によきモデルを提供することにもなるのです。（在学生のほうからいえば、自分も努力すれば、あそこまでは到達できるというはげみになるのです）。また、ご父母および後援会の方々には、「なぜ自分の子どもを聖学院大学に入れようと思ったのか」や、「聖学院教育に期待すること」などを語っていただきたいと思っています。

5. 現在聖学院大学には一一五名のクリスチャンがいます（『第23回 教会と学校との懇談会の資料』九ページ参照）。日本のキリスト教大学のなかでは、聖学院大学は最多のクリスチャン学生を擁していると思います。量（数）と質がよく問題にされますが、私は、量（数）が多くなれば質も良くなると思っています。（いくら質がよくても、

量(数)が足りなければ、何かを変えていく力にならないのです。(これは、聖学院大学大学院教授古屋先生の持論でもあります。古屋安雄著『日本伝道論』の六二―六四ページ参照)。ですから、次の目標として、一五〇―二〇〇名のクリスチャン学生が常時与えられている状態を可能にしたいと思います。

6. 現在聖学院大学では、一回三十分、週四回の全学礼拝がおこなわれています。大学によつては、例えば、一回の時間をながくして週一回というところもありますが、私は、少なくとも週四回を堅持していただきたいと願います。一回の時間をながくしても回数が少なくなれば、どうしても、キリスト教大学のスピリットや香りがだんだんと消えていくことになります。

7. 聖学院大学では、教会の礼拝になるべく近い形で礼拝がおこなわれています(キリスト教学校教育同盟が全国の大学・短大に「大学礼拝は今どのように」というトピックでアンケートをとった時に、聖学院大学はそのように回答しています。二〇〇一年四月号の『キリスト教学校教育』六ページ参照)。私は、二つの理由で、このやり方を続けていただきたいと思います。ひとつには、学校での礼拝が、なるべく教会の礼拝に近い形でおこなわれるならば、学生たちが教会の礼拝に出席した時に、あまり違和感を覚えすつと教会の礼拝に入りこむことができるからです。今ひとつは、なるほど「交読文」や「主の祈り」は、現代の若者たちにとつてわかりやすいとは決まいませんが、右の項目3の理由により、これらは残しておいていただきたいと思います。

8. 聖学院大学では、現在、特別礼拝として、イースター礼拝、ペンテコステ礼拝、創立記念礼拝、クリスマス

礼拝などがおこなわれています。私は、これらに二つの特別礼拝を加えることと、クリスマス礼拝後に大学全体の祝会をもつことを提案したいと思います。

新しいチャペルとともに、薔薇園ができるとうかがっております。その薔薇園の薔薇を、礼拝においてささげ、ささげられた薔薇を、近隣の病院や老人ホームや児童施設や幼稚園に届けたいでしょうか。

成人祝福感謝礼拝をおこなったかどうか。これは、私の発案ではなく、緑聖教会のある会で、菊地先生がおっしゃったアイデアです。

チャペル完成とともに新しいキャフテリアもできるようですので、クリスマス礼拝の後、祝会を計画したらどうでしょうか。どういう祝会にするかは、今からアイデアを出しあえばよいと思います。

9. 現在、週報の下の所に年間聖句が記されています。その聖句をめぐって、一週間位集中的に奨励がなされてもいいと思います。

10. 二〇〇二年度の全学礼拝において旧約聖書がとりあげられたのは、創世記、サムエル記下、詩篇、箴言、伝道の書、イザヤ書、エレミヤ書、アモス書でした（『第23回 教会と学校との懇談会の資料』11—13ページ参照）。旧約聖書と新約聖書のあいだで、少しバランスを欠いているように思われます。シリーズ礼拝などで、旧約聖書を意識的にとりあげて、バランスをとりもどしたいと思います。

11. 現在、日本語による奨励がほとんどで、英語と中国語による奨励が年に一、二回あります。韓国からの留学

生が現在何人いるか把握していませんが、韓国語による奨励も年に一、二度あつてもいいのではないのでしょうか。

12. 「証し」は、ほとんど学生によつてなされているようです。学生による「証し」は、靈的にも豊かであり、そして適確なことばが用いられ、さらに時間もきちんと守られる場合がほとんどなので、今後も学生による「証し」は続けていただきたいと思います。

13. 緑聖教会のある会で、濱田牧師が、「讚美歌をもつと大きな声で歌えないものだろうか」と言われましたので、「聖学院大学では、基礎科目に「音楽（声楽）」が入っていないのですか」と尋ねました。半期で十分と思いますので、全学生必修にしたらどうでしょうか。（ちなみに、横道にそれますが、「榮養学」を全学生必修にするのが望ましいと思います。このままでいくと、日本の若者たちの体がだめになり、人類は二十二世紀を迎えずして滅びることになるかもしれません。「体育」も現代の若者たちにとって必須だと思います。これは、聖学院大学では、全学生必修かどうか把握しておりませんが、開講されていることがわかりました。）

14. 礼拝遅刻者の問題と、その遅刻者のマナーの問題（ボタンとドアの音をたてて入り、そして靴の音をたてて歩き、さらに音をたてて席にすわるというようなこと）があると思います。前者については、私自身が真っ先に反省すべきであると思っています。後者については、ほんとうは外面的な「マナー」の問題ではなく、キリスト教が最も大事にしているところの、他の人に対する「繊細なる精神」を持ち合わせているかどうかだと思います。このようなありようをどのようにして育んでいったらいいか、大事な課題を与えられていると思います。

15. 聖学院大学の宗教主任の先生方は、協力してよき働きをしておられることは全教職員が認めることであります。ただひとつだけ以前から気になっていることは、研究日の関係で、金曜日の礼拝には阿久戸学長と濱田牧師の二人だけが出席しておられます。宗教主任の先生がたは、常時最低三人が礼拝に出ることができるよう工夫がほどこされてよいのではないのでしょうか。

16. 職員の方々も全学礼拝に出席できるような環境を整えていくことを、大学全体として考えはじめたらどうでしょうか。そして、可能な範囲で、職員の方々にも奨励をしていただきたいと思えます。(学生によりよい教育を提供していく場合、教員と職員は、どちらも欠くことができない「車の両輪」であるといえましょう)。

17. 右記の項目2ともかかわっていますが、聖学院大学全体がよりよいコミュニティになっていくために、挨拶をされたら、なんらかの形でそれに応答するというごくごく当たり前のことをしたいと思えます。(まず教職員の間で、このことを実行しようではありませんか)。

18. 新しいチャペルに、音色のすぐれた良質の鐘を取り付けていただくことを希望いたします。もう十五年位前になりますが、イエール神学校に滞在して、ブッシュネルの資料を調査・収集したことがあります。その時、一時間毎に、鐘の音がキャンパスに響いていたことを今なつかしく思い出します。また、ミレーの「晩鐘」は、私たちのよく知るところであります。美しくそして厳かな鐘の音が、毎日定時に、キャンパスのみならず近隣に響きわたることは、いろいろな意味においてはかりしれないよき効果をもつことになるだろうと確信しております。

19. 本日のテーマと直接には関わっていませんが、地域の方々の協力でできたチャペルそのものが、地域の方々に身近なものとなるような方法を、大学で考えはじめていきたいと思っています。（聖学院大学は、地域との協力・信頼関係を深める大学を志向し続けたいと思います）。